

### モーツァルト：ディヴェルティメント K.563

最晩年のモーツァルトが残した室内楽の傑作。すでに三大交響曲の作曲を終えた 1788 年 9 月に完成。ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ（各 1 本）という編成は稀少で、作曲技法的にも難しい。なお、3 つの楽器（「3」という数字はフリーメーソンのキーナンバー）、（♭が「3つ」用いられる）変ホ長調、委嘱したのがフリーメーソン仲間の裕福な商人プフベルクであったことなどから（歌劇《魔笛》と同様に）フリーメーソンとの関連をみる向きもある。

第 1 楽章はソナタ形式のアレグロ。下降音型の冒頭主題から、ヴァイオリンによって次々に歌われる第 2 主題、第 3 主題とも、たおやかな気分を満たされている。チェロが颯々と歌い始める第 2 楽章はアダージョ。跳躍を含むヴァイオリンのメロディはオペラのアリアを彷彿とさせる。第 3 楽章は憂いを含んだメヌエット。ヘミオラ・リズム（バロック時代のポリリズム）の使用に、交響曲第 40 番との類似性を聴くこともできる。主題と 4 つの変奏からなる第 4 楽章は、民謡風の旋律がとりわけチャーミング。再びメヌエットとなる第 5 楽章は、二つのトリオを含み、ヴィオラが主役を気取った第 1 トリオと、ヴァイオリンが主導する可憐な第 2 トリオが交歓する。ここでもオペラの舞台が想起されるだろう。軽快なアレグロの終楽章でヴァイオリンが奏でる無垢で天真爛漫なメロディは一度、聴いたら耳から離れない。

### モーツァルト：ディヴェルティメント 第 17 番 K.334

作曲は 1779 年後半と推測される。モーツァルトのディヴェルティメントのなかでも人気の作品で、特に第 3 楽章は“モーツァルトのメヌエット”の愛称で親しまれている。6 つの楽章から構成され、2 本のホルンと弦楽器という楽器編成。

短い序奏の後、沸き立つようにヴァイオリンが奏でる第 1 楽章は、ソナタ形式のアレグロ。リズムックな楽想は第 2 ヴァイオリンが弾く第 2 主題にも引き継がれる。第 2 楽章はアンダンテで、16 小節の主題と 6 つの変奏からなる。厳粛な雰囲気をもたせたニ短調で、変奏が進むごとに切迫した哀感が増す一方、第 4 変奏の大らかなホルンの二重奏が安らぎを与えてくれる。第 3 楽章は優雅極まりないメヌエット。中間部のトリオではヴァイオリンの華やかなトリルが聴きもの。第 4 楽章はゆったりとしたアダージョ。ヴァイオリンがひたすら抒情的に歌うが、ほのかな哀愁が全体を覆っている（ホルンは沈黙）。第 5 楽章のメヌエットでは、華やぎが戻ってくるものの、ヴァイオリンが哀切な表情を挟み込む。ヴァイオリンが軽快なロンド主題を奏でる第 6 楽章はアレグロ。朗らかに突き抜ける“歌”が魅力的。不思議な哀愁とひたすら明るい曲想の混じり合いが、このディヴェルティメントを人気作にしているのかもしれない。